

長期的に滞在したエリクソンの眼差しは、まさに民族学者のように生活文化の細部にまで及んでいるので、読者はリアリティのあるタイムトラベルを楽しむことができる。

撮影された事象のなかには、競馬の騎手となる子供たちの、ズボンに縫い付けられたフェルト製の鞍(10ページ)や、頭飾り(11ページ)のように、現地調査でもはや確認することができないものもある。ローゼン氏によれば、エリクソン本人から聞き取られた解説が残されており、今後、各写真に関する情報によって理解が促進されるかもしれない。

そうした情報に代えて、本書では、当時、交流のあった人々による記録と照合するという、考証作業が加えられている。そのことが同書の価値をより一層強固なものにしていると言えよう。例えば、S.ヘディンやH.ハズルンド・クリステンセン(viiページ)、世界で最初に毛沢東を取材したことで有名なW.ボスハルト(112ページ)などの記載との照合が挙げられる。上述のラーソン(250-251ページなど)や、その後アメリカに亡命したデロワホクト(132-133ページ)は被写体としても登場している。また、徳王と非常に親密な関係にあったことは写真の多さが示している(109-152ページ)。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、さまざまな探検家による写真コレクションが残されているけれども、これほど充実した記録は無いと言っても過言ではない。通過する者ではなく、滞在する者であったことがこの違いをもたらしている。このような貴重な映像記録を手にとって味わうことができるようにした本書は、読者にとってまさに“福音”であるに違いない。



(国立民族学博物館・客員教授)